

あけのほし 2015年4月

「学ぶよろこび」

菊田行佳

『神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。』

(創世記3章11-13節)

テレビ番組の中で視聴率があるのは、ドラマでしょう。毎日の連続ドラマ小説を楽しみにしている人も大勢います。私たちがどうしてそれほどドラマや小説に興味を抱くのかと言えば、それはその物語の中に自分の姿を見出しているからではないでしょうか。まったく知らない地域や今の時代からかけ離れている物語であっても、私たちと共通する人生を学ぶ機会が、その中にあるのだと思います。「我支払う、ゆえに我あり。我購入す、故に我に価値あり」という標語の下にある私たちの世界の中で、それだけでは満たすことの出来ない人生の意味を探したいという思いが、そこにはあるのだと思われまます。

そのような生涯を通して私たちが学ぶことの出来るものの中に、古典というものがあります。源氏物語や平家物語などが有名ですが、過去の遺物から私たちは人が生きるということにまつわる様々な事柄を学ぶことができます。これが、欧米の国々に行けば、キリスト教の聖書ということになるわけですが、私たち日本人にしてみれば、聖書から学ぶということは異文化の教養を身に付けるということになります。欧米の人々の考え方、価値観を知りたいのであれば、聖書をひもとくことが近道となるわけですが、ただ、最近の事情は少し違ってきているようです。

ヨーロッパやアメリカは、キリスト教国という印象を持ちがちですが、現代では聖書を読まなくなっているとのことです。ドイツの中学校の宗教科の授業で、女性教師が苦心して久しぶりに聖書を用いたところ、生徒たちからの受けは良かったのですが、同僚の教師から執拗な反対を受けました。彼女は教会の専門的な監査のもと、なんと学校から引かされてしまいました。このようなことは過去30年間度々あったとのことです。学校教育が古典から人生を学ぶという教養と対立してしまう典型的な例だと言えるでしょう。

聖書を始めとして古典から学ぶということは、人間に共通している普遍的な事柄に接することの出来る大きなチャンスです。冒頭の聖書箇所は、聖書の最初のところに出てくるところなのですが、ここには人間というもののありのままの姿が、写実的に生き生きと描かれています。ここに出てくるアダムというのは、人の名前ではなくて男の代表という意味ですが、男は自らの責任を厳しく追及されることに大変弱いという姿がユーモラスに表現されています。そして、その重さに耐えかねて、自分より弱い女に責任をなすりつけて

います。どこか身近なところで、いつも見かける光景ではないでしょうか。

そして、女は男の身勝手さに抵抗することもなく、かといって自分の責任や連帯的な問題を自ら請け負って解決して行くという主体性もなく、やはり他者に責任転嫁をするという選択をしてしまいます。つまり、男も女も結局、人間というのはどっちも大して立派な生きものではないのだと、皮肉を込めて現実の姿を明らかにしているのだということでしょう。

ここには、人を英雄として扱ったり、あるいは自国民を讃えて他民族への優位性を弁証するような意図はありません。どの民族においても、どの時代においても、人間に共通した事柄を、読者に学ばせることが目的としてあるわけです。「ああ、人間というのは何時の時代も変わらないな。はじめから責任のなすりあいをしていたのか、バカだな」と笑いながらも、それでもスーッと「ああ、自分にもこういうところあるよな」と、受け入れてしまうように構成されているのです。

古典から学ぶということは、このような普段の日常においては気がつくことの出来ない生の自分の姿に、出くわされるということが起こります。それは、それまで気が付かずになっていたけれども、ずいぶん自分は人間というものに、過大な期待を掛けすぎていたという振り返る機会を与えてくれることになるでしょう。自分に対しても、そして周りの人々に対しても、重すぎる期待を背負わせて、息も途切れ途切れにハアハアあえぎ、ろくに生きている喜びを感じられなくなっているという事態に、ああ、自分は陥ってしまっていたのだということ、学ぶチャンスが古典にはあります。

聖書では、人というのは身勝手になく、責任転嫁をしないものなのだという理想化した姿を、決して提示したりはいたしません。そこに出てくる登場人物は、みなやはり、「人間」なのです。都会の生活に嫌気がさしてそこから飛び出してみたのは良いけれど、地方を転々と巡り歩いて行くうちに、やっぱり都会が恋しくなって、帰りたいな、もうつかれたなど、自主独立の道を選んだことを後悔する者もいれば、兄の相続財産を自分のものにしようと企んだ弟が、結局その貪欲さから身を滅ぼして、かえって困難な人生を歩むことになるという話もあります。

それらの人間が織りなす、どこにでもあるような物語の中で、それでも、現実の自分たちの姿と向き合い、彼らはまた、立ち上がって前に進んで行きます。都会を飛び出した人物は、結局自分の土地を手に入れる事はありませんでしたが、その代わりに本当の幸せがなんなのかを、知ることとなります。また、兄を騙した弟は、自ら招いた苦しみの人生の中で、それでも、人生の意味、生きる事の本当の喜びというものを、見つけていきます。

今年度のこの「あけのほし」では、そのような古典として聖書から、人の人生にまつわる事柄を、学ぶ機会として提供させて頂きたいと考えています。「教育」から排除されがちな聖書ではありますが、私たちの人生を豊かにする生涯を通しての「教養」においては、まだまだ光を放つことの出来る聖書です。皆様の人生を少しでも彩り豊かなものとして活用されますことを願っています。